ラオスのこども通信

65号
2015年12月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 都会と地方のギャップが広がる中で。▶P.1
- はじめる・つながる・つくりだす［2015.7-2015.10］ ラオス発 ▶P.2　日本発 ▶P.3
- みんなでボランティア ▶P.4
- 活動報告会 ▶P.4
- メコンのほとり「交」▶P.4

写真の説明はｐ４をごらんください。

都会と地方のギャップが広がる中で。

村の学校から首都ヴィエンチャンに戻ると、建設中のビルや明るいネオンが夕暮れに浮かび、村の風景とのギャップに戸惑う。大きく変化するラオスの社会環境。より子どもたちに届く図書活動がますます求められていると再認識させられた。

首都で高まる私立校熱

少し前までは外国人やお金持ちの特別な子どもが通うところだった私立の学校は、今はヴィエンチャンでは中流層の普通の子どもが通っている。当会のラオス・スタッフに聞くと、

「安いところは公立校でかかるお金とほとんど変わらない（公立校は授業料は無償だが、行事、水、掃除代などいろいろ徴収がある）。校舎がきれい、学習環境が整っているといった理由で子どもを私立に通わせる親が増えた」とのこと。放課後は塾に行ったり、語学学校に行ったり、習い事をする子どもも多い。「子どもによりよい教育を受けさせたい」という親は確実に増え、その受け皿と選択肢が広がっている。そうした中で、懸念されるのは教育の質の改善も進んだのかという点である。校舎は立派になったが、教員の意識の面など取り組むべき課題は多いと実感させられる。

ルアンナムター県の小学校

地方の変わらない状況

北部のルアンナムター県ナーレー郡の２つの村の学校を訪問した。どちらも小学校と中学校が隣接している。

小学校の教室を覗くと、教科書を持っている児童は約3分の1。先生が黒板に書いた文字をノートに書き写す授業。5年生の教室では、小さな弟を横で寝かしつけながら机に向かう女の子もいた。そこには10年前、20年前とほとんど変わらない学校の姿があった。

中学校は、校舎の裏に寄宿舎がある。生徒約300人。そのうち6～7割は家が遠いため、そこに寝泊りしながら学校で学ぶ。金曜夕方に家に帰り、日曜夕方または月曜早朝に学校に戻ってくる。

中学校の寄宿寮

中学生は自分たちで野菜を作り、昼食を作る

寄宿舎といっても小さなもので、2畳ほどのところに3～4人で寝ているという。面倒をみてくれる寮母さんがいるわけではなく、生活全般を自分たちでおこなわなければならない。寝る部屋（小屋）とは別に、食事を作る小屋もある。昼休みに覗くと、ちょうど昼ごはんを用意していた。たき火の上には小さな鍋がぐつぐつと煮えていた。たくさんの野菜が入っているが肉は見当たらない。4人分ぐらいの鍋かと思ってきくと、7人分だという。食べ盛りの中学生たち、これで足りるのだろうか。

野菜は学校横に自分たちで育てている。米は週末に各自が家から持ってくるが、十分に持ってこられない生徒もいるとのこと。この辺りは山あいで、季節によっては朝晩とても冷え込むのだが、寒い時期でも半袖の服しかもっていない生徒もいるのだと、案内してくれた先生が心配そうに語っていた。

共同の井戸で洗濯をしている生徒がいた。横にはたくさんの洗濯物が干してある。休み時間に家事労働をしながらの学校生活である。座っていた中学4年生の女の子にスタッフが何気なく聞いてみた。

「来年は5年生(日本の高校1年生)だね。進学するの?」「わからない」と答える少女。自分の将来は自分の一存では決められない様子であった。

先生方も学校横の寄宿舎で生活している。小さな子どもを抱きかかえながら、ときに横に置いたベビーカーに寝かしつけながら、授業をしている先生を4人みかけた。充分な教育環境を保つのはなかなか厳しい。材料や道具がたやすく買って手に入るわけではない環境では、何でも自分たちで作りださなければならない。必然的に、生活そのものに時間や労力を要し、その分、教育・学習の時間が削られてしまう現実がある。

紙芝居にワクワク。

十分とはいえない環境の中で変化の兆し

小1の教室から元気なラオス語を読む声が聞こえた。ベテランの男性教諭が、繰り返し黒板に書いたラオス語の文字を子どもたちに読ませていた。教室はにぎやかで、子どもたちは楽しそう。「覚えるのに時間がかかるからね。反復練習が大事なんだよ」と先生。

中学校の教室から流暢な英語が聞こえてきた。若い男性教諭が教育省のカリキュラム通りに全て英語で指示をしながら授業をすすめていた。中学6年生(高2)の生徒たちは、一生懸命に教科書の会話文を読み合っている。

先生に聞くと、オーストラリアで4年間英語を学び、いろいろな選択肢もあったが、故郷に帰り英語の先生になったという。「子どもたちに英語を学んで自分の世界を広げて欲しい」と語る。

十分とはいえない環境の中でも、教育に情熱を注ぐ先生たち。私たちが学校に設置した図書室が助けになればと思う。子どもたちがラオス語や英語の本をたくさん読み、自分の世界を広げて欲しいと心から願う。　(赤井朱子/東京事務所)

新しく届いた本を開く。

はじめる・つながる・つくり

ラオス発

創作活動のしかたを先生が身につけるために

『ラオス折り紙ハンドブック』を2014年に出版し、とても反響がありました。次のステップとして、折り紙を通して子どもたちと一緒に創作活動ができるようになることを目的として、8月、小学校と子どもセンターの先生を対象に「ラオス折り紙ワークショップ」を開催しました。

先生たちの作品ができあがっていく。

3日間の日程で2回、当会ラオス事務所併設図書館で行い、31人が参加。折り方の基礎から、授業での活用まで学びました。講師を務めた当会のチャンシーは、「ラオスの子どもたちは創作活動の機会がなく育っている子がほとんど。その楽しさを、まず先生に知ってもらい、子どもたちに伝えてほしい」

先生たちも、やる気があるけれど機会がないだけ。ひとつ教えると「これも、これも、もっと教えて!」と積極的でした。「創作活動をしたいけれど何をどうやったらいいかわからない、という相談をたくさん受けました。先生たちの悩みを聞き、少しでも協力したい。それが私たちの仕事」と力強くチャンシーが語りました。次回は地方で開催できたら、と意気込んでいます。

ご支援:キヤノン株式会社　(尾澤美春/東京事務所)

図書館、学校とはちがう居場所

昼休みに当会ラオス事務所併設の図書館にやってくる中2の女の子6人。いつもケラケラと笑い声が絶えずにぎやかにしている。が、今日は少し静かにスタッフのチャンシーの周りに集まって何やらおしゃべりしていた。

見ると、体の中の仕組みを描いた大きな本を開いておしゃべりしている。開いた頁は、女性の体の中を詳しく書いたページであった。もしやと思い会話の内容を聞いてみると、チャンシンーが妊娠の仕組みついて説明している。女の子たちは、いつになく真剣に聞いていた。いろいろと質問をし、チャンシーが一つひとつ説明していた。

図書館担当のチャンシー。折り紙ワークショップの講師も務める

後で聞くと、「彼女たちが『チャンシーお姉さん、どうしたら妊娠するの?』って聞いてきたのよ。だから、あなたはどう思っているの?って聞いたら『よくわからないけど、男の人の隣に寝ると妊娠するんじゃない?』と言ったので、本を持ってきて説明してあげていたのよ」学校ではそういうことは学ばないのかとたずねると「やるけど、ほんのすこしだけ。男女一緒の教室だし、先生が話し出すと、みんながきゃあきゃあ騒ぎ出すから、先生もすぐに話をやめちゃうの。親にはやっぱり恥ずかしくて聞きにくい。だからここで聞いたの」

開いていた人体図は、かなり詳しいものだが、英語だったので、もう少し簡単なラオス語で読めるものをチャンシーが教えてあげると、早速女の子たちが借りていった。

当会の図書館では、雑誌を見ている子、折り紙をする子、ただおしゃべりする子、スマホで動画をみたりゲームをしたりする子、さまざまな過ごし方をしている。ほっとできる居場所になっていたら何よりだ。

＜出版プロジェクト＞

「クム族の民話集」

再話：スックサワン　シーマーナ
絵：アーリーナー・アーパイワン、アムパーポーン・ラッタニョート、ウートン、カンケオ・シーマーナ、サイチャイ・パンタヴォン
部数：3,000部（うち1,500部が株式会社すかいらーくのご支援）

クム族に伝わる10話をまとめた民話集。「おばけ娘」「カメくん」「鹿とフクロウ」など、動物と人間の知恵くらべ、貧しい孤児が金持ちを負かす話や土地の由来といったユーモラスで不思議な世界が描かれています。

学生たちがリコーダー・ダンス教室を開催

8月、ヴィエンチャンで小中学生を対象に大学生7人でリコーダー・ダンス教室を開催しました。オーラ・リーなど小さい子には難しい曲もみんなで吹けるようになり、妖怪ウォッチダンスも楽しく踊りました。学生たちは、子どもたちのもっと吹けるようになりたいという積極的な様子に、強く胸を打たれたと口々に語っていました。

日本発

ラオス研修をもとに中学校で授業

7月4日、町田市立真光寺中学校の「国際交流の日」、学習院女子大学の学生がラオス研修をもとに授業を行いました。テーマは「ラオスと日本から考える豊かさと国際協力」。グループワークを交えながら、「豊かさとは」「どんなことで国際協力が出来るのか」、中学生は自分なりの答えをさぐっていきました。

「日本の、自分の生活ももっとよくできる努力をしたい」「ラオスから教わったこともたくさんあった、日本の良さも改めてわかった」「ラオスに行ってみたい！」などの感想。中学生の柔軟な思考力を垣間見ることができました。この授業がこれからの興味と将来の幅を広げるきっかけになればと思います。

（星川亜紗美／ボランティア）

1000冊達成！ラオス語絵本づくりイベント

7月11日、沖電気工業株式会社第16回「ラオス語絵本を作ってラオスの子どもたちに送ろう！」イベントが開催され、総勢41人で絵本作りをしました。

毎年参加している社員の皆さんは、慣れた手つきで素早く、そして丁寧に仕上げていました。初めて参加した方は、昔読んだ絵本を懐かしみながら、一つひとつ慎重に翻訳を貼り付けていました。絵本の最後に、自分の名前をラオス語で書いて完成です。「ラオス語って難しい！」見慣れない文字を書くことを楽しんでいるようでした。合計89冊が完成。この日、作成した絵本の累計冊数が1,000冊を超えました。長い間、ラオスの子どもたちを支援してくださった皆さんに改めて感謝いたします。

（諏訪小百合／インターン）

沖電気のみなさんと。

グローバルフェスタJAPAN2015

10月3日・4日、「グローバルフェスタJAPAN2015」に出展しました。今年は会場をお台場に移し、日本最大級の国際協力イベントとして大変盛り上がりました。飲食ブースではラオス風焼き鳥とビアラオの販売、活動紹介ブースでは物販とともにラオスの教育環境についてのパネルを製作。留学生といっしょにラオス語絵本の読み聞かせも行いました。たくさんの方が訪れ、ラオスを味わい、見て、聞くことのできるイベントになりました。

（佐藤由理／インターン）

留学生スックさんがラオス語で読み、インターン古谷さんが日本語訳。

みんなでボランティア

きっかけづくりを広められたら

岸 朋美さん(インターン)

グローバルフェスタにて。岸さん(左)、今号執筆の佐藤さん(中央)と葉山さん。

私がラオスのこどもと関わったのは、大学のボランティアの授業がきっかけでした。関わる前はNGOに対し少し固い印象がありましたが、スタッフの方も含め当会のボランティアの人たちは皆暖かく印象はがらりと変わりました。何かやりたいという思いをすぐ行動に移せる場でもあり、当初ラオスについて知識も少なかったのですが、活動を通してラオスへの理解を深め、今年の夏には2週間ラオスで子どもたちに向けたリコーダー教室のプログラムを行うことができました。NGOに実際関わり大変だと感じたのは、資金調達やイベントなど全て一人ひとりの手で行っているということです。人手が限られた中、ボランティアの方々と協力し合うことが求められ、イベント時には力仕事も多いため特に若い人たちの協力も必要だと感じました。NGOに関心のある学生は多くいますが活動に関わるチャンスがあまりないかと思います。そういった中で、当会のラオス語絵本プロジェクトをはじめイベントを通しきっかけづくりの場を広めることができればいいなと思います。

支援するうえで何に重点をおき活動をするのかはそれぞれのNGO団体で異なりますが、困っている人たちの力になりたいという想いは皆共通であると思います。支援活動というと大きく捉えがちですが全て人と人との繋がりであり、ぜひ小さなきっかけからボランティア活動に参加してみて下さい。出会いを大切に活動していきたいです。

イベントで安保法制への反対を表明

集団的自衛権を可能とする安保法案が9月に成立しました。NGOの活動地に行われる自衛隊の「駆け付け警護」は平和構築をめざすNGO活動を阻害するなどから、当会は10月に開催したイベントで出展ブースに反対表明を掲出しました。

グローバルフェスタ JAPAN2015、お台場(東京)

活動報告会

ラオス事務所駐在員帰国報告会　報告:本多敏子(2015年8月22日　ライフコミュニティ西馬込)

読書がラオスに根づき、日本からの支援がなくても読書が行われることを目指す当会の取り組みを報告。持続可能な読書環境となるには、「子どもたちに何を伝えたいのか?」を意識した作品と作り手の育成も大きな課題であることが報告されました。

表紙の写真

遊んでいるんじゃないよ。校庭に植えた苗木を囲う柵をみんなで作っているんだ。そうしないと、牛やヤギが葉っぱを食べちゃって、木が育たないからね。材料の竹は、さっき山からみんなで運んできたんだ。先生と一緒に、割って削った竹を、組み合わせているんだけど、結構力がいるから大変なんだよ。ここはルアンナムター県ナーレー郡のモックチョン小学校。4年生、5年生たち、でした。

特定非営利活動法人　ラオスのこどもの目的は、
子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択でき、
公正で平和な地球社会づくりに貢献することです。
教育が十分に普及していない地域のひとつラオスで活動し、
ラオスと日本をはじめ子ども、人々の参加を通じて、
だれもが成長の機会を得ることをめざします。

ラオスのこども通信 65号

2015年12月発行　編集人:森 透
発行:Action with Lao Children / DeknoyLao

(認定) 特定非営利活動法人　ラオスのこども
〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603
e-mail:deknoylao@yahoo.co.jp
http://deknoylao.org
都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 徒歩7分
郵便振替 00140-6-462494

これからの予定 2016年1月〜3月

2016年も活動ミーティングを奇数月、勉強会を偶数月、それぞれ第3土曜日に開催します(一部異なる日もあります)。

<活動ミーティング>

現地報告、国内イベントの打ち合わせ、会の運営の意見交換などを行います。
1/16、3/19

<勉強会>

次回の勉強会は企画調整中です。内容や会場とあわせ、詳細はホームページでお知らせします。

<京都 ラオス織物展>

日程:2016年3月30日(水)〜4月4日(月)
会場:京都住蓮山安楽寺　ギャラリー花いろ
京都駅から // 市バス5号系統「岩倉操車場」ゆき「真如堂前」下車
四条河原町から // 市バス203号系統「祇園・錦林車庫」ゆき「真如堂前」下車

チャンタソン講演会も開催予定です。詳細はホームページでお知らせします。

メコンのほとり交

子どもたちと出会って

みんな素直。ラオスの子どもたちと出会い、一番に感じたのはこのことです。彼らは表情豊かで、言葉が通じなくても気持ちは通じ合うことができました。私がラオスを訪れた時、子どもたちは笑顔で歓迎してくれました。普通なら異なる国から来た人は言葉も通じないので、声をかけることもできないと思います。しかし彼らはすぐに私たちの近くまで寄ってきて、遊ぼう、こっちにね…とジェスチャーで一生懸命伝えようとしてくれました。子どもたちの顔からはいつも心から楽しんでいる様子を窺うことができました。お別れの時間になると、「ありがとう」と声をかけて毎日外まで見送ってくれました。そして皆、好奇心旺盛で私たちが何かしようとするとすぐ近くに集まってきます。この様子を見てさらに日本の文化や彼らにとって新しい世界を知ってほしいという思いが強くなりました。

思い思いに絵を描く子どもたち。

豊かな自然の中で。

交流する中でおもしろい発見をしました。子どもたちに自由に絵を描いてもらった時のことです。どのような絵を描いているのか周ってみると…なんとほとんどの子が全く同じ絵を描いていたのです!—晴れた空の下に大きな山と一本の川—ラオスの子どもたちは皆テレパシーで通じ合っているの?!…もちろんそのようなことはなく、これは小学校に入って初めに習う絵であるそうです。ラオスの自然の素晴らしさを子どもたちの絵から感じ取ることのできた一場面でした。(葉山智美/インターン)

＊葉山さんはリコーダー・ダンス教室(本紙p3)のメンバーです。